

神戸新聞社 フィールドワークを終えての感想

①

◆NIE に関して全くの無知の状態でお話を聞いて、NIE 教育によって得られることの良さと大切さを知りました。まず、震災やウクライナでの戦争等を通して①正しい情報が人の命を救うこと②リーダー次第で国が危機的状況に落ちることを大前提に、新聞やニュースがつけられていることです。情報化社会の中で SNS 上のトラブルやフェイクニュース等の問題が挙げられ、それによって関係のない他者をも巻き込まれて苦しんだり、震災時の誤った情報による判断で命の危険があったりします。そこで必要なのは、正しい情報の取捨選択ができることであり、その先端に立つのが新聞や報道機関だと今回改めて感じました。NIE の様々な例を聞いて私自身が似た経験をした授業があったり、一度尾木直樹(尾木ママ)さんが先生をしていた際に新聞を活用した授業を行っていた話を思い出したりしました。たとえ世間に興味が全くなかったとしても、新聞を使う機会を通して初めて新聞の面白さや豊富な情報を得られることの喜びを知ることが出来ると考えました。

普段テレビや新聞を見る機会が減ってしまった私たちですが、単に手を付けていないだけでもっと身近に感じるように自ら工夫することはお話を聞いて出来ると思いました。私の場合は、「神戸新聞 NEXT」「東京新聞」「琉球新報」を、ラインを通して読んだり、実際に新聞社の HP より記事や社説を読んだりしています。膨大な情報の中で正しい情報を得られて、その出来事をきちんと自分で考えて理解できるようになりたかったからです。その際、各新聞社で一番重要視している出来事や記事のメッセージ性が似ているようで異なっていること、いかに緊急性や訴えが強いかを感じました。今回その熱意を、お話を通して改めて感じて、これからの私自身が新聞をもっと身近に意識したいと思いました。そして情報を提供することが人の命や人生に強く影響することを改めて強く思いました。

②

◆私は実家で神戸新聞をとっているが、あまり読むことがなかった。しかし、神戸新聞社を訪問してみて毎日家に届く新聞にいかに多くの人に関わり、いかに慎重に丁寧に選び抜かれた情報と伝え方で作られているのかを学んで、新聞をこれからきちんと読みたいと強く思った。実際に神戸新聞社訪問から今日に至るまで毎日トップ記事を読んでみて、自分が身の回りの小さな社会だけしか見ることができていなかったということを痛感した。

初めは新聞全てを読むことは難しい。自分が実践してみて、その日のトップ記事や見出しだけでも読もうと意識することが重要だと感じた。NIE 教育で学校現場で新聞を取り入れる時にも、まずは自分の興味が惹かれるものを読んでみる、見出しだけでも読もうとすることが大事だと子ども達に伝えたいと感じた。現代社会は様々な情報が錯綜しているため、個人が情報を適切に判断し取り扱う情報リテラシー能力が一層重要となる。加えて、GIGA スクール構

想によって子ども達が ICT を扱う機会が増加したことで子ども達は今まで以上に膨大な情報に向き合っていかなければいけない。子ども達にとって新聞が身近な情報ツールと捉えられるような親しみやすい NIE 教育の実践を通して、広い視野を持って社会を捉え、情報について自分なりの考えを持ち、それを伝えることのできる力を子ども達に身につけてほしいと願う。

③

◆神戸新聞社を訪問し多くのことを学びました。まず記者の仕事や心得を学んだ後、通常は入れない勤務場所内まで見学し、身近で朝刊の編集作業中の職員の皆さんの様子や、職場の雰囲気を感じることができました。次に阪神・淡路大震災の災害報道について学び、新聞が災害報道でどのような役目を果たしているか知りました。そして、まわしよみ新聞作りなど NIE の実践例を学び、私達も SDGs のテーマに沿って新聞スクラップの作成を体験しました。SDGs に関する記事が 1 日の新聞からこんなに見つかるのかと改めて問題意識を確認でき、

また新聞を用いた授業作りの可能性の幅を知って、授業を作る上での視野・発想が広がりました。私は新聞社を訪問したのは初めてだったのですが、日頃よく見る新聞の一つ一つの記事がこんなに多くの人の手によって大切に丁寧に作成されていると知り驚きました。今回の訪問で NIE の可能性を知ることができたので、大学の授業で指導案を書く際や、将来授業を行う際に、NIE を効果的に取り入れてみたいと感じました。

④

◆新聞社に訪問するのは初めてでとても貴重な体験をさせて頂いた。どのようなことに留意して新聞を作っているのか、スマホで簡単に欲しい情報を得られるようになった世の中で新聞を読むことにどのような意味があるのか興味があった。普段は見られない新聞社内を見学して、新聞をどのように作っているのか空気感を味わうことができた。テレビのように映像が消えてしまうメディアではなく、各自の手元に残るためより一層正確性が求められる。特に災害時では少しの間違いが大きな混乱を招くためいつも以上に気を付けていると知った。何回ものチェックは人間が行っており、1日分の新聞でも多くの人が分担して作り上げていた。また、情報を残すことができるメディアだからこそ、災害など忘れてはいけないものを伝えていくためには打ってつけであり、教育に携わりたいと考えている私たちには新聞を、情報を得るものだけでなく教材という見方もできることを学んだ。災害を経験していない人々が災害を伝えるには、当時に書かれた文章や写真は空気感を伝えることができるため適していると思った。

さらにNIEを実際に体験してみて、あらゆるジャンルの情報に触れることで自分では興味のないニュースを読む機会になることや、1つの記事を深く読むため記者が何を伝えたいか考えるようになるというメリットがあると気づいた。定期的に続けていくと教養だけでなく読解力アップにも繋がるだろう。NIEには色々な種類があり、生徒やクラスの色によって工夫することができ、今後の教員生活で積極的に新聞を活用したいと思った。社内の掲示やお話から新聞社で働く人々はみな誇りを持って仕事をしており、私も誇りを持って仕事をしていると感じてもらえるような教員になりたいと思った。

⑤

◆毎朝実家に届く新聞制作の裏には、たくさんの方が関わりなん度も確認作業が行われているということを知れた。情報を発信するというにはそれだけの責任があることを感じた。自分が何かの情報を発信する立場になったときは、このことを思い出したい。また、阪神淡路大震災を風化させないための取り組みも知ることができた。実際に震災を経験していない私も含めて、これからの世代に伝えていく努力をしていかないといけないと感じた。

⑥

◆私は奈良県で生まれ育ち奈良県で教育を受けてきたが、阪神淡路大震災のことについて教科書に載っている程度しか知らなかった。同じ近畿なのに、同じ日本なのに知らないことが多すぎて自分自身すごく驚いたし、私はこのことを子ども達に伝えていかなければならないと感じた。当事者にしかわからないこと、体験しないとわからないことも沢山あるが、それらは映像に残っているものを活用したり素材は沢山あると思う。そのなかで、子ども達に何を伝えられるかが大切だと思った。

阪神淡路大震災が起こったとき、宿直だったという話を聞いたが、その直後から新聞を出せる準備を始めたり記事を書いたり写真を撮ったり、自分たちは被害者である以前に伝える立場であることを強く意識されていて、自分の立場に責任がないとそのような行動はとれないと思った。そのような人たちがいてくれたから今の私たちが支えられていることに気づけた。

新聞社見学では、実際の現場を生で体験でき、貴重な経験になった。締切の時間が5分ごとに書いてあったり、時計やテレビが沢山あったり、普通の仕事よりも時間や情報を意識していて、プロだと思った。

普段何気なく目にしていても、その裏にはたくさんの人たちの努力や意識があって成り立っているんだということを学ぶことができ、子ども達にも伝えていきたいと強く感じた。それに、私は新聞をみる機会が少なく興味が薄くあるわけではなかったが、今回の経験を通して、新聞はさまざまな情報が知れたりテレビや携帯からの映像とはまた違った、能動的な活動ができると感じたので、教材に適していると感じた。

⑦

◆小学生の頃に社会科見学として地元の新聞社を訪問したことがあった。覚えていた限り新聞の作り方は全国共通であった。私は新聞をとっていないし、自ら新聞を読みたいと思ったことがなかった。だが、ネット社会で新聞は紙媒体のみに頼らず、業態を変えながら継続していきたいという新聞社の方の話を聞き、これからはデジタル新聞なども活用したいと感じた。また、新聞はたくさんの情報が載っているため、見出しから自分の興味のある情報を取捨選択することができるのが利点であると、グループワークを通して考えた。新聞はテレビやラジオやTwitterなどのネットの情報よりも素早く情報を提供することは難しいが、沢山の人が新聞づくりに関わっていることから、とても正確な情報で信憑性は他のメディアよりも長けていると思った。

⑧

◆神戸新聞社に行って、普段見られない、行けないところを見ることができて、とても楽しかったし、たくさんの学びもあった。学びとしては、情報を発信するのに、莫大な時間と労力がかかっていることである。情報を収集し、その情報を発信するか否かの取捨選択をし、どのように伝えるかを考え、間違いがないか確認する。そのように、多くの過程を経て情報が私たちに伝えられていることを学んだ。情報の受け手である自分も、情報を全て鵜呑みにするのではなく、正しい情報か判断する目が必要だと思った。また、新聞は「人命と人権を守る」ためにあるとおっしゃっていて、教育と似ている点があると感じた。学校教育では、教科や教科以外のことも教えるが、それは人命を守ること、そしてある程度の知識を義務教育の9年間で教えること、その教育を受ける権利が平等にあることは、人権を守ることに似ていると思った。このような学びの他に、新聞を使った交流や、新聞を作成していただけて、本当に楽しかった。行ってよかったと思った。

⑨

◆私は神戸新聞社への訪問を通して、情報を伝えることの難しさや責任の重さについて知ることができた。まず1つの記事や新聞が出来上がるまで何度もさまざまな人が確認し、再取材をおこなったり、推敲をする工程を知り、私たちが得ている情報は精査されたものだということを知った。なぜこんなにも確認を行うのかというと、言葉一つで読者の受け取り方が変わってくるからだ。その言葉の選択一つで、読んだ人が嬉しい気持ちになったり、不愉快な気持ちになったりするから多くの人が何度も確認するのだということを知った。

また他には過去の災害を後世に伝える大切さについても学ぶことができた。特に阪神淡路大震災という出来事を風化させないために、新聞で特集を組んだり、他の事業と協力してイベントを開催したりさまざまな取り組みがなされていることを知った。

⑩

◆新聞を使った授業は実際に自分も経験がありましたが、それは単に道德の授業の時に人権問題に関わる記事を読んだり、社会科の授業の初めに今日の大きなニュースを読んだりするなどの活動しかなかったので、「なつみつけ」や実際に体験させていただいた「SDGsに関係していると感じた記事を選ぶ」など、新聞を使うと一口に言っても様々な活用方法があるのだと気付かされました。また、私は阪神淡路大震災を経験しておらず、自分が教育者として教壇に立ったとき、この災害の記憶を風化させないために何ができるのかを考える中で、もちろん継承しなければならないという気持ちも理解できるのですが、「もうあの震災を忘れてしまいたい」と考える人との関わり方を考えていく必要があるのではないかと思います。

⑪

◆新聞社の内部を見学し、普段できないような貴重な体験をすることができた。特に新聞を使った調べ学習を実際に行う中で、将来教師になった時に授業内で新聞をどのように活用するか考える良い機会になった。また、阪神・淡路大震災等の災害時の神戸新聞社の活動についても

お聞きし、災害報道の大切さについて知り、考えることができた。普段考えることの無いような報道の大切さについて学ぶ大変貴重な経験になった。

⑫

◆ 厳重な時間管理の中たくさんの人々が確認する機会があることで、読者が毎日情報を得られていることを実感しました。また、阪神・淡路大震災の際の新聞や資料を見て、ただ現状を伝えているだけでなく、物資のある場所や避難場所など、読む人々の安心・安全のために役立つ情報提供をされていたことや、今も語り継ぐことで犠牲者の生きた証を残すことを大切にされていると知りました。私は震災を経験していないため、教師になった際にどのように子どもたちに伝えていけば良いかと少し不安でしたが、子どもたちに震災のことを他人事に思ってしまうため、今回知ったことをヒントに南海トラフ地震と関連されたり、当時の新聞記事やニュース、経験した人の語りを見聞きしたり等、できる工夫を考えていきます。新聞をつかった調べ学習も体験し、新聞に触れることで興味のなかったことにも興味を持つきっかけになると感じたため、教育現場での活用法も考えていきたいです。お忙しい中、本当にたくさんの貴重なお話や体験をありがとうございました。

以上です。

貴重な経験の場を本当にありがとうございました。

兵庫教育大学 大学院学校教育研究科 教授
勝見 健史